

書評

筒井淳也

立命館大学産業社会学部 教授

本書シリーズは、東京大学社会学部科学研究所が行っている「働き方とライフスタイルの変化に関する全国調査 (JLPS)」を利用した一連の論文集である。JLPSは、2004年から実施されている「高卒パネル調査 (JLPS-H)」と、その後2007年からスタートした「若年パネル調査 (JLPS-Y)」および「壮年パネル調査 (JLPS-M)」の計3つの調査からなる。シリーズ1巻ではJLPS-YおよびJLPS-M、3巻では主にJLPS-Hの分析が展開されている。

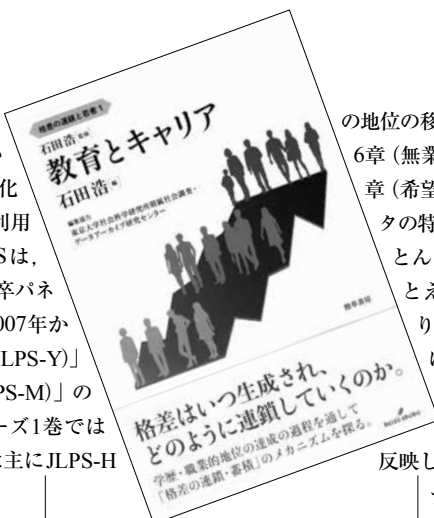
1巻の「総論」でデータの概要が紹介されているが、JLPSは設計・実査・公開といった点で、理想的なデータのライフサイクルを持つパネルデータの一つである。シリーズにおける研究の根本的な問題意識は、不安定化した若年層の就業や家族形成の実態を、パネル追跡調査によって正確に記述・分析することにある。

以下、紙幅の都合で個々の論文の内容まで紹介することはできないが、全体的な感想を書く。まず気づいたことは、使用データがパネルデータであるとはいえ、いわゆる因果効果の推定はほとんど行われていない、ということだ。計量経済学であれば、主要な分析手法は固定効果モデルであり、パネルデータを使う目的は個人の異質性によるバイアスを除去し、より妥当な因果効果を推定することに置かれる。

しかし本シリーズではそうではない。1巻の1章(入職経路の初職への影響)、2章(初職と能力の規定要因)、3章(入職年齢と就業機会の関係)、3巻の1章(幸福度・収入でカテゴライズした若者の特性)、2章(教育・職業アスピレーションと進学の関係)、3章(親と同居する若者の事情)、4章(キャリアデザインの変容)、5章(フリーター観をめぐる分断)、6章(若者の投票行動)においては、基本的に因果効果の推定には主眼が置かれていない。

しかし本シリーズではそうではない。1巻の1章(入職経路の初職への影響)、2章(初職と能力の規定要因)、3章(入職年齢と就業機会の関係)、3巻の1章(幸福度・収入でカテゴライズした若者の特性)、2章(教育・職業アスピレーションと進学の関係)、3章(親と同居する若者の事情)、4章(キャリアデザインの変容)、5章(フリーター観をめぐる分断)、6章(若者の投票行動)においては、基本的に因果効果の推定には主眼が置かれていない。

その他の論文、たとえば1巻の4章(5年間の従業上



教育とキャリア

格差の連鎖と若者1

石田 浩 監修・編

勁草書房
2017年
A5判, 296ページ
3,400円

ライフデザインと希望

格差の連鎖と若者3

石田 浩 監修 佐藤 香 編

勁草書房
2017年
A5判, 272ページ
3,024円

の地位の移行表分析)、5章(所得状態の移行)、6章(無業と社会的孤立との関係)、3巻の7章(希望の変化)においては、パネルデータの特性を積極的に活用しているが、ほとんどの場合、調査時点間の移行(たとえば就業状態の変化)の分析であり、異質性の統制がなされているわけではない。

このことは、社会学的な問題関心からくる分析方針の特性を反映しているといえよう。同じパネル

データであっても、経済学では異質性の統制が主目的になるのに対して、社会学ではより記述的かつデモグラフィックな分析が多い。デモグラフィックな分析とは、「○

○とは、そもそもどういう人たちののか?」といった分析のことだ。研究関心の違いもあるだろうが、本シリーズにおける各論文の分析は、理にかなっている。1巻「総論」でも触れられているが、因果効果の分析という目的においては、パネル調査には調査観察であることからくる限界がある。措置を選び取るのは対象者であり、研究者が無作為に割付を行っている

わけではない。パネルデータ分析による異質性の統制はたしかに強力だが、横断調査と同じく、セルフ・セレクションの観察データなのである。そうなると、パネル調査の利点を活かすならば、状態移行(たとえば仕事や社会的ネットワークの個人内変化)の記述を通じたライフコースの実態把握も有効なのである。

一連の丁寧な分析を通じて、興味深い知見も多数見出されている。すべてを挙げることはできないが、たとえば、3巻3章の「行政・学校・企業が自らの存続のために若者とその家族に負担を転嫁」(103頁)についての知見、同じく4章の(キャリアデザインについて)「画一的な男性、多様な女性」(128頁)といった知見は、若者のライフコースやその展望についての極めて示唆に富む議論である。

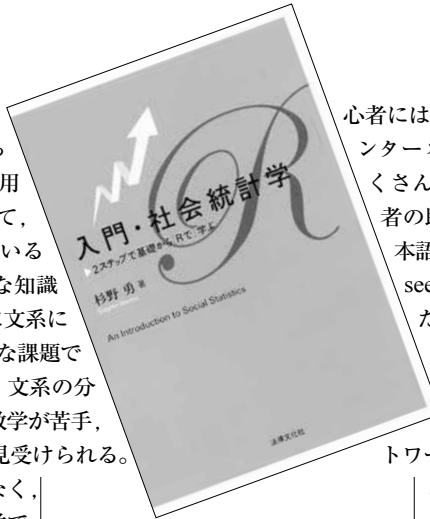
統計学の知識は、様々な領域で不可欠のものとなっている。ビッグデータなどの用語が流行語となる昨今において、その重要性は日に日に増しているように感じられる。この重要な知識を体系的に伝えることは、特に文系に分類される分野において、困難な課題であり、創意工夫が求められる。文系の分野では、全員ではないものの、数学が苦手、嫌いといった学生がしばしば見受けられる。

私が専門とする心理学だけでなく、仄聞する限り、社会学や経済学でも似た状況にあるようだ。

今回書評で取り上げる『入門・社会統計学』は、このような困難な課題に挑む意欲的な試みである。私が見る限り、特徴は2つある。一つはフリーの統計解析ソフトRを積極的に利用したことである。もう一つは記述統計、重回帰分析など、各章で取り上げるトピックについて、基礎と発展の2つの段階を用意したことである。

統計学の教科書は、解析方法の理論的な解説に重点を置くものが多い。しかし、本書は、理論に重点を置いた典型的な教科書でもなければ、ソフトウェアの使い方に重点を置いたハウツー本でもない。双方の要素を持っている珍しい本である。本書の章立てを見てみると、記述統計にはじまり、t検定や分散分析、果てにはマルチレベル分析までぎっしりと内容が詰まっている。これらの様々な解析手法について、理論的な解説を行うだけでなく、Rで解析するためのコードが紹介される。Rのコードがあることで、読者は統計の理論的な側面とともに、実際の解析に役立つ実践的な知識を学ぶことができる。つまり、理論と実践を備えた統計学の知識を身につけることができる。

Rは、ソースコードを書くプログラミング要素が多いソフトウェアである。コードを書くことは初



入門・社会統計学

2ステップで基礎から[Rで]学ぶ

杉野 勇 著

法律文化社
2017年
A5判, 246ページ
3,024円

心者には敷居が高い作業だ。ただし、インターネット上にはRについてのたくさんの情報があり、それらが初学者の助けになる。Rの記事(特に日本語記事)に特化した検索ならば、seekrという検索エンジンが便利だ(<http://seekr.jp>)。googleなどの汎用検索エンジンと比べ、適切な情報にヒットする確率が飛躍的に高くなる。ネットワーク上でコミュニケーションを

とりながら質問がしたいなら、slackのr-wakalangというオープンなチャットルームをおすすめする。信頼できる好事家が常駐していて丁寧に教えてくれる。本書を読み進める中でRを使った作業につまずいたら、インターネット上の情報を活用して試してほしい。

この本にはぎっしりと内容が詰まっている。そうすると読みやすさが損なわれたり、教科書として使い勝手が悪くなったりすることが多い。本書は、各章で基礎と発展というレベル分けを行うことで、それを回避

することを目指したのだろう。良い工夫である。

ただ、やはり内容が多い。この書籍は社会調査士資格取得カリキュラムのD(社会調査に必要な統計学に関する科目)、E(多変量解析の方法に関する科目)、I(多変量解析に関する演習(実習)科目)の3領域に対応するそうである。なかなかどうして重厚だ。講義の教科書として使うのなら、講師による内容の取捨選択が必要になるだろう。自習テキストとしてつかうのなら、初学者は基礎に絞って8章の重回帰分析まで身につければ、まずは十分ではないだろうか。もっとも、じっくり学びたいのなら制限なくどこまでも学ぶとよい。内容が詰まっている本書はそのような自由を保障してくれる。



宮本みち子

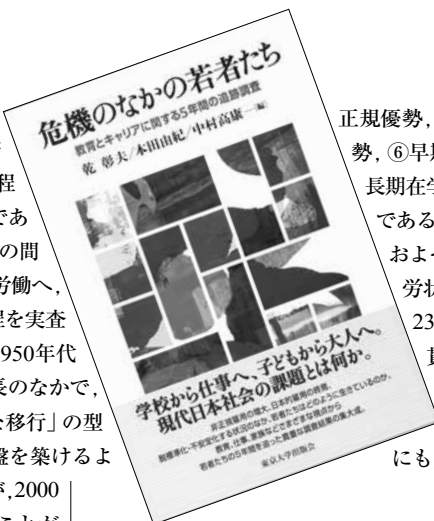
放送大学 客員教授
千葉大学 名誉教授

本書は2007年から2012年にかけて、20歳の若者を対象に5年間の移行過程を追跡した調査の分析結果である。研究の動機は、過去20年間に大きく変容した学校から労働へ、子どもから大人への移行過程を実査で把握することにあった。1950年代後半から始まる高度経済成長のなかで、学校から労働への「標準的な移行」の型が確立し、安定した生活基盤を築けるようになった若者たちの状況が、2000年代に入って大きく崩れたことがその背景にある。調査は、過去20年で若者に何が起こったのかを明らかにしようとしている。

この研究の功績は、同一対象者を5年間にわたって継続的に追跡したところにある。このような縦断調査が日本になかったのは、標準的移行パターンが海外にくらべて長期間続いたために、若者の移行に対する問題意識が希薄だったことが原因であろう。激変する20年を実査によって把握しようとする貴重な調査だといえよう。追跡調査は途中での脱落を防ぐことが難しいが、本調査では最終的に891人の有効サンプルを確保した点は重要である。また、そのうち49人にインタビュー調査をし、対象者の生の声を聴いている。

本書の構成は、I部で調査の目的と概要を示したのち、若者の移行を構成する要素に従って、労働（II部）、家族（III部）、地域（IV部）、学校（V部）、意識と人間関係（VI部）の分析結果がまとめられている。

分析方法の特徴は、移行パターンを規定する主要因である在学期間の長さ（後期離学か早期離学か）と雇用形態（正規か非正規か）の2軸に着目したことである。その組み合わせによってつぎの8つに類型化し、どの分析においてもこの類型を用いて比較している。類型は、①後期離学・正規優勢、②早期離学・正規優勢、③後期離学・非正規優勢、④早期離学・非



危機のなかの若者たち

教育とキャリアに関する5年間の追跡調査

乾 彰夫
本田由紀 編
中村高康

東京大学出版会
2017年
A5判, 424ページ
5,832円

正規優勢、⑤早期離学・正規優勢→非正規優勢、⑥早期離学・非正規優勢→正規優勢、⑦長期在学、⑧早期離学・失業無業優勢の8つである。その結果を大まかに把握すると、およそ57%が最終調査時点で安定した就労状態を一定期間維持している。一方、23%が最終調査時点で離学後ほぼ一貫して非正規中心の不安定な就労状態にある。これに一定期間不安定な状態にある者を含めると、32%にも及ぶという結果である。5年間にお

ける移行のパターンに着目して割合を把握できたこと自体が、本調査の重要な知見といえよう。

分析は多岐に及ぶため、紙面の制約から十分な紹介ができないことが残念である。ここでは労働、社会保障、離家の3つの側面から見えてくる若者の移行の姿を紹介しよう。早期離学と結びついた非正規雇用は、雇用保険、公的年金、医療保険などの社会保険からの遺漏と結合している。一方、非正規雇用であるほど離家しない傾向がある。つまり不安定な移行の途上にある若者にとって、親の家はセーフティネットの

役割を果たしている。しかしそのことは、若者自身と社会保障制度との関係をあいまいのまま放置しかねない。加えてひとり親等の場合、親の家がセーフティネットの機能を果たしていない場合があることも、本調査の分析で示されている。

男女別の結果も興味深い。最終調査時点で不安定な状態にある割合は男性23%に対して女性は31%で、不安定な女性の割合が高い。『下層化する女性たち』（勁草書房）の編者として、若い女性たちが労働市場からも定位家族・生殖家族のどちらからも排除されている様を見てきた評者にとって、これは納得のできる結果である。若者の移行に関してはジェンダーによる違いを十分に意識する必要がある。男性、女性にフォーカスする章があってもよかったのではなかろうか。

「『エスノグラファー』というレッテルを私に對して押しつけようとするいかなる試みも拒絶する。」——このように述べたのは、米国の社会学者ハーバート・ガンズである¹⁾。

ガンズが*Urban Villagers*をはじめとする優れた都市民族誌を著した、第一級のエスノグラファーであることを考えれば、このガンズの表明は非常に奇妙なものにも思える。しかし、ガンズのこの発言の背景には、「エスノグラフィー」がバズワード化することによって、現場観察法の意義が見失われがちな風潮に対する深刻な懸念がある。(実際、ある時期からは単純な聞き取り調査までもがエスノグラフィーという言葉でくられるようになっていく)。

この点に関連して、ガンズは次のようにも述べている。

「実証研究のプロセスそのものとはあまり関係の無いエスノグフィー関係の文献の中には、続々と出版される参与観察関連の技法書が含まれている。いまやその点数は、参与観察にもとづいて書かれた調査報告書の数を上回るほどである²⁾。」

日本でも、ガンズが1990年代の米国の状況について指摘したものと同様の事態が生じている。実際、この四半世紀ほどの間に日本で刊行された調査法関連のマニュアル本や技法書の点数は驚くほど多い。その一方で、それらの文献で紹介されている方法を実際に適用しておこなわれた優れた研究となると、ごく限られている。一方で「エスノグラフィー」と銘打ってはいるものの、「分厚い記述」とは言い難い、軽めの素描で手際よく仕上げられた新書の類を書店や新古書店で見受けることが稀ではない。

このような現状からすれば、四六判で500ページを超える大著である『飯場へ』は、まさにエスノグラフィーないし参与観察研究と呼ぶに値する稀有で骨太の現場報告だと言える。

本書の骨子は、著者が関西圏の4カ所の「飯場」でのべ140日余りにわたって就労した経験である。その実



飯場へ 暮らしと仕事を記録する

渡辺拓也 著

洛北出版
2017年
四六判, 506ページ
2,808円

体験を踏まえて、著者は、飯場の労働実態や職場の特徴、労働者のあいだで形成される社会関係の特徴などをつぶさに描き出している。著者はまた、それらの現場における知見を、膨大な先行研究の蓄積の中に確実に位置づけた上で説明している。本書の魅力は、フィールド日記や観察記録からの引用と学術的な分析とを意図的・戦略的に組み合わせている点にある。さらに、本書の随所には手書きのフィールドノーツからの引用や現場写真、作業道具のスケッチなどがふんだんに盛り込まれている。それが本書全体に、堅苦しい研究書としてのエスノグラフィーの枠には取まりきれないエスノグラフィティのような印象をも与えている。その意味で、本書は、文学と科学の混成ジャンルであるエスノグラフィーの特性を存分に生かしたものだと言える。

このように、ある意味で型破りな構成ではあるものの、本書の基本的な性格は、著者の博士論文を下敷きにした学術書である。それもあって、フィールド日記を踏まえて書かれた第1章や各章に盛り込まれた調査現場でのエピソードに関する言及を除けば、本書は、(調査協力者を含む)より広い読者層にとって読みやすいものとは言い難い。

無い物ねだりを承知で、あえてここで1つ提案してみたいことがある。それは、著者が本書に盛り込んだ内容を元にして、広範な読者層に向けた著作を今後発表していくことである。ただし、評者としては、くれぐれもそれが「ファスト新書」風の安直な読み物などにはならないことを願いたい。

注

1) Gans, H., 1999 "Participant observation in the era of 'Ethnography!.'" *Journal of Contemporary Ethnography*, 28(5): 544.

2) *ibid.* 541.



山中速人

関西学院大学総合政策学部
メディア情報学科 教授

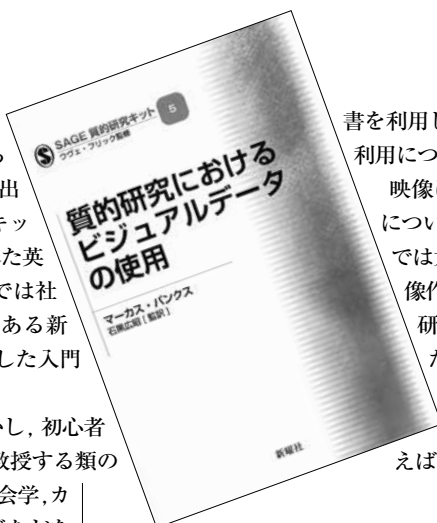
本書は社会科学系の出版で定評のあるSAGE社からシリーズで出版されている「質的研究キット」の一冊として刊行された英文の原書を、同様に日本では社会科学系専門書で定評のある新曜社が翻訳書として出版した入門書である。

入門書とはいが、しかし、初心者には調査手法のノウハウを教授する類のものではない。人類学、社会学、カルチュラル・スタディーズなどを中心に、「映像」が「研究」という人間行為においてもつ位置づけとは何かについての本質的な議論を展開する意欲的な内容になっている。訳者あとがきでも触れているように、映像データを用いた調査研究がもつ「基本的な諸問題を簡潔に整理して読者に提示」することに主眼がおかれている。したがって、本書は、実際に調査研究で映像を活用したことのある研究者たちにとっても、自らの研究実践を振り返るのに意義深いものと思われる。

本書の構成にそってその要点をまとめると、以下のようなだろう。

導入部である第1章では、調査に映像を用いることについて、その意義と制約について概観され、本書の構成が紹介される。

続く第2章では、社会を映像によって研究する営みの歴史が扱われている。短い章の中で簡潔かつ適切に紹介された歴史は、これからこの分野に取り組もうと考える研究者にとって役立つものとなるだろう。ただ、歴史をみれば、人間の手によって描かれた「映像」としてのスケッチや絵画などの機械的作像技術以前の「映像」も学術研究に広く利用されてきた。機械的作像技術以後の「映像」に対象を絞った本書の戦略は現実的ではあるが、本



質的研究における ビジュアルデータ の使用

SAGE質的研究キット5

マーカス・バンクス 著

石黒広昭 監訳

新曜社
2016年
A5判, 224ページ
2,592円

書を利用しようとする者は、それ以前の映像利用についても知っておくべきだろう。

映像による研究にまつわる理論的問題については、第3章で扱われている。ここでは大きく2つの領域、つまり、既存の映像作品や記録を対象にした分析理論と研究者が調査のために撮影し作成した映像データの分析にわけて、それぞれ簡潔に理論的な言説が整理されている。前者については、たとえばカルチュラル・スタディーズの理論

的視点、後者については、この次の章につながる経験主義的な方法論について、その特徴と問題点をまとめている。

第4章では、フィールドワークにおけるビジュアルデータの収集と分析について論じられている。ここでは、おもに写真誘発法と映画誘発法をとりあげている。ただし、フィールドにおける映像利用の全体像をみれば、フッテージフィルムなどの資料的な記録映像の利用も重要である。これについては関連書の併読を勧めたい。また、映像の研究利用に関する「倫理と匿名性」

の問題にも簡潔に触れられている。

最後の第5章では、ビジュアルな素材を使ったプレゼンテーションについて論じている。今日、仮想現実や拡張現実の技術を使った技法など、急速な進展が見られる分野であるが、それとは別に、映像をプレゼンテーションに活用する際の本質的な問題を考察するために重要であろう。

かつて紙とフィルムという媒体の差異によって、テキストとは異なった取り扱いを受けてきた「映像」は、デジタル化技術の進展によって、その差異は消滅しつつある。そのような状況をにらみつつ、「映像」を研究利用することの固有性の課題について、改めて理論的に俯瞰し、共有の知を構築する本書のような試みが続けられる意義は大きい。